

【カリタスの家便り】2010. 1.2月合併

11月22日に「東京カリタスの家子ども相談室」が主催、東京カテドラルケルンホールで開催されたシンポジウム「ダウン症児の未来に向けて」に参加させていただきました。まず、ダウン症のお子さんを育てられたお母様のお話、次に、日本ダウン症協会理事長である玉井邦夫先生(大正大学)の講演、最後に、参加者の方を交えたディスカッション、という構成でした。

シンポジウム冒頭のお母様の話をお聴いた後、現在の社会においてマイノリティとして生きるとはどのようなことなのか考えさせられました。私たちが今生きている社会は、基本的にマジョリティの特性に準拠して作られています。公共施設や交通機関の設備設計、工業製品の規格設定、教育や法律などの制度策定など、全てにおいて「五体満足かつ平均的知能レベル」であるマジョリティがその使用者・対象者として想定されています。そのような社会はマジョリティにとっては便利である一方、「五体満足かつ平均的知能レベル」という基準から外れた人々に対して過酷な側面も確実に持ち合わせています。そのような社会の中にあって真面目に勤務をこなし、豊かな趣味をもって生き生きと生活しているご本人の力、そして、ご本人をそこまで育ててこられたお母様の力、さらには、支援をしてこられた学校・職場・地域など周囲の人々の温かさ、そうした様々なことが聴く者に伝わってくるようなお話でした。

玉井先生のお話は、専門的な内容を大変分かりやすく、しかし決して浅いレベルで留めずに、参加者の方々に伝えるものでした。ダウン症の方に多いとされる認知機能の特性についてお話される際にも、まず心理学についての基礎知識を簡潔に説明されてから本題に入られます。ですから、予備知識ゼロでお話を聴いていても、ダウン症の方がどのような世界を生きているかが頭に浮かんでくるようです。また、青年期以降のダウン症の方にときおりみられる「退行」と呼ばれる現象についても、現場での経験や最新の研究知見を盛り込んだ説得力ある議論を通じて、「必ず回復する」という主張をなされています。これは、家族の方はもとより、教育・医療・福祉など多くの分野で働く方々にも希望を与えることと思います。さらには、玉井先生ご自身がダウン症のお子さんをお持ちだからでしょうか、ダウン症の子ならではの子育ての苦労など、きれいごとだけでは済まない現実について触れたお話もありました。そうした誠実さが、会場にいられた保護者の方々の共感を呼んでいたように思われます。

最後のディスカッションにおいても、保護者や教育関係者の方々の質問に対して、誠実に分かりやすい言葉を使って答えられる玉井先生の姿勢は一貫しており、質疑のやりとりを聴いているだけでも多くのことを学べる、実り多いシンポジウムだったと思います。